特集

山形の戦争の記憶を、未来へ

戦後80年以上が経過し、戦争を直接体験した人から話を聞くことが難しくなっています。県では、戦争の資料や記憶を、未来へ確実に引き継ぐための取組みを進めています。

山形にもあった戦争

「戦争」と聞くと、激しい地上戦のあった沖縄や、原子爆弾が投下された広島・長崎などを思い浮かべる方が多いかもしれません。しかし、山形にも戦争は確かにありました。

県内からも多くの人々が戦地へ赴き、命を落としました。また、旧満州（現在の中国東北部）への開拓団には多くの県民が参加し、その数は全国2位でした。県内に目を向けても、東根市には旧海軍の神町航空隊が置かれ、金山町には満州開拓青少年義勇隊の訓練施設として建てられた「日輪舎」が現在も残るなど、各地に戦争の痕跡を見ることができます。さらに、家族が大切に保管してきた写真や手紙、当時の生活用品、家庭内で語られてきた体験があります。

山形にも、地域や家庭に、一人ひとりの戦争の記憶が残されています。



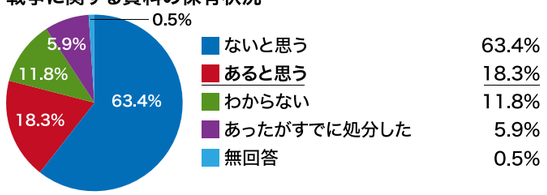
県民の方が保管している当時の写真
（満州開拓団の様子）

失われつつある戦争の記憶

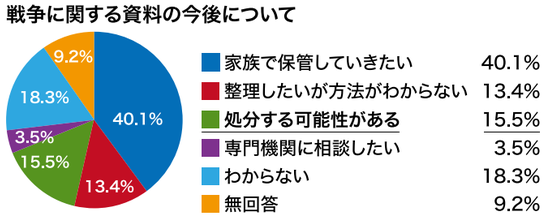
戦後80年以上が経過し、戦争を体験した方が少なくなる中、地域や家庭に残る写真や手紙などの資料は、当時の出来事や人々の暮らしを知るための貴重な手がかりとなっています。

県が実施した県民アンケートでは、18・3％の方が戦争に関する資料が自宅や実家などに「あると思う」と回答。一方、その資料保有者のうち15・5％が「今後、処分する可能性がある」としており、貴重な資料が失われていく可能性があります。

戦争に関する資料の保有状況



戦争に関する資料の今後について



また、世代交代が進むにつれ、資料が残っていても、その由来や背景がわからなくなることも考えられます。地域や家庭に残された資料と、それにまつわる記憶をどのように守り、次の世代へつないでいくのかが課題となっています。

記憶を受け取り、次の世代へ

戦争に関するモノや記憶を次の世代へつないでいくためには、今残されている資料を保存するとともに、そこから戦争について知り、学び、伝えていくことが大切です。

県では今年度、若者が戦争の資料や記憶を受け取り、次の世代へつないでいく活動を支援するモデル事業を実施しています。また、小学生を対象としたワークショップや「語り継ぐ戦争の記憶展」を開催するなど、さまざまな世代が戦争について知り、考え、受け継いでいく取組みを進めています。



モデル事業の実施風景：
戦争体験者からの記憶の聞き取り

若い世代によるモデル事業の実施

令和8年度は、大学生を中心とする2つの学生団体の取組みを採択しました。若い世代が戦争の記憶を受け継ぐ活動を進めています。そのうちの一つ「山形大学まちの記憶を残し隊」は、戦争を体験した方への聞き取りを進め、戦争体験や地域に残る記憶の記録・保存に取り組んでいます。

小学生ワークショップの開催

夏休みに合わせて実施し、山形市や南陽市などから小学生約20名が参加しました。開拓団として満州に渡った両親のもと、現地で生まれ、引揚げを体験した齋藤幸子さんから当時の話を伺いました。参加した小学生は、戦争について考え、感じたことや学んだことをまとめた自分だけのノートを作成しました。



ノート作りに取り組む小学生



講師の齋藤幸子さん（満州引揚げ体験者）

「語り継ぐ戦争の記憶展」を開催

8月1日から27日まで、県生涯学習センター「遊学館」で「語り継ぐ戦争の記憶展」を開催しました。戦争体験者などへの聞き取りをもとに作成したパネルや、戦争体験をつづった手記、関連資料などを展示し、山形に残る戦争の記憶を紹介しました。





これからの継承に向けて

県では、こうした具体的な取組みを進めるとともに、戦争関係資料の保存や記憶の継承を将来にわたって確実に行うため、今後のあり方について議論する検討委員会を設置しました。

委員会には、学識経験者のほか、地域で資料の保存や継承に取り組む方などが参画しています。戦争関係資料の収集・保存をはじめ、戦争体験者の証言の記録、資料のデジタル化や公開、学習での活用、若い世代が継承にかかわる機会づくりなど、幅広いテーマについて検討を行っています。

今後、委員会での議論を踏まえ、地域や家庭に残る貴重な資料を守り、山形の戦争の歴史や記憶を次の世代へつないでいくための取組みを進めてまいります。

YouTubeからご覧ください。
やまがたサンデー5でも「未来へつなぐ戦争の記憶～山形の挑戦～」を放送しています。

▶問い合わせ ◎ 地域福祉推進課 ☎023-630-2995